

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：特定領域研究

研究期間：2004～2009

課題番号：16089202

研究課題名（和文）カンパニア地方の都市とヴィッラ集落をめぐる社会史的研究

研究課題名（英文）” Sociological Study of the Cities and the Villas in Campania”

研究代表者

本村 凌二 (MOTOMURA RYOJI)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：40147880

研究成果の概要（和文）： まずローマ帝政期にイタリアのヴェスヴィオ火山北麓にあった別荘の遺跡を発掘する作業を踏まえて、その周辺のカンパニア地方の遺跡の分布状況と比較しながら、その当時生きた人々の心性を解明し再構成しようとした。それとともに、古代人の精神生活が後世の伝承にいかなる影響を及ぼしたかを探究した。とくに、理論的見通しから、5段階の実態分析（表象文化・言語文化・家族関係・社会構造・人口動態）を相互にフィードバックする形で、日常生活における「人間の感性と感情」を「心性の考古学」として究明した。

研究成果の概要（英文）：

Abstract: Our researches shed new light on the following three fields: (i) the cultural mindsets of people in the Roman Empire under the Principate, with special reference to a villa excavated to the north of Mt Vesuvio, the project of whose reconstruction in the archaeological context of Campania and other villas has amplified our researches; (ii) the influence of those mindsets upon the later tradition; and (iii) an archaeology of sensibility and emotion in the civilisation(s) theoretically approached through the close-knit analyses of representation, language, family ties, social structures and population dynamics.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2004年度	10,200,000	0	10,200,000
2005年度	15,000,000	0	15,000,000
2006年度	16,700,000	0	16,700,000
2007年度	16,800,000	0	16,800,000
2008年度	15,800,000	0	15,800,000
2009年度	11,900,000	0	11,900,000
総計	86,400,000	0	86,400,000

研究分野：人文社会系

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：①古代ローマ ②カンパニア ③社会史 ④心性 ⑤表象文化 ⑥言語文化

⑦日常生活 ⑧宗教

1. 研究開始当初の背景

火山活動の一つである火山噴火はその周辺地

域に様々な被害をもたらす。噴火によって周辺地域の地形が大きく変化する一方、火山噴

火によって形成される堆積層は、それまでの表土を被膜すると同時に地表面上に建立されていた構築物等を包含することがある。本領域研究が研究対象地として選択したイタリアの埋没遺構及びその周辺は度重なる火山噴火の堆積物によって幾層もの層序をなしており、これらの噴火堆積物によって研究対象であるローマ帝政時代の文化と自然がほぼ正確に保存されているというきわめて恵まれた前提条件を備えている。

したがって、外形的な再現作業とともに、そこに生きていた人々の意識や行動の基層をなす感性と感情にまで迫って解明することは、豊穡の文化がもたらす恩恵と限界を見極めるためにも有効な手掛かりとなる。とくに、豊富な史料群に恵まれたカンパニア地方は「感性と感情の考古学」の方法を掘り起こす宝庫の可能性を秘めていると考えた。

2. 研究の目的

イタリア南部のカンパニア地方は古代・中世を通じて多様で豊かな史料を蔵しており、過去の世界を再現できる稀有な例である。ここでは、家屋や町並みのような外形の復元のみならず、生きていた人々の意識や行動まで掘り下げることすらできる。とりわけ、意識や行動の基層をなす感性と感情にまで迫って解明することがのぞまれる。われわれはこれを「感性と感情の考古学」と名付け、その分析と解明を研究目的の最終地点と考えている。その手続きとして、古代の生活空間をいかにして感得するかが焦点となる。それは基底をなすものから順に、表象文化、言語文化、家族関係、社会構造、人口動態として理解されるものの複合体をなしている。それらを通じて古代地中海世界の頂点にあって平和と繁栄を享受してカンパニア地方の都市とヴィッラ集落に生きていた人々の感性と感情を再現することができる。この作業のためには、中世から現代にいたる人々の気質のなかに古代の痕跡をたどることも必要であり、伝承や習俗の分析を通じてより精緻な古代世界の復元を目論むものである。それは現代歴史学の大きな課題であり、そのためにカンパニア地方は得がたい素材を提供する格好の作業現場となるだろう。

3. 研究の方法

歴史における人間の感性と感情を分析する研究は狭義には認知考古学の分野に属するが、それらの理論的考察を参考にしながら、本領域研究は以下の5段階を踏みながら分析を進め、古代地中海世界の頂点にあって平和と繁栄を享受したカンパニア地方の都市とヴィッラ集落に生きていた人々の感性と感情を再現していく。

(1) 表象文化的分析

ヴェスヴィオ山北麓の別荘遺跡の発掘復元作業と並行して、カンパニア地方の古代遺跡、とりわけポンペイとその周辺地域の遺跡をそこに生きていた人々の五感に輸入される諸要素の集合体として解明する。都市およびヴィッラ集落を中心に自然環境および生活環境の復元データを収集・利用し、それらを同時代人の文献史料に残る言説と対応させることが主たる作業となる。それとともに、それらの言説の語句と後世の人々との実感の差異を明確にしなければならない。たとえば *purpura* (紫) という色彩がどのように受けとめられていたかは、時代や地域によって異なっており、古代人の色彩感覚そのものが解明の対象となる。

(2) 言語文化的分析

表象分析を通じて無意識下にひそむ感性の基層が開示されることを踏まえて、それらを意識化するものとしての言語表現を分析しなければならない。それによって、古代人の関心の在り方を探り、そこから彼らの感情の生態が鮮明な姿で描き出される。具体的には、この地域に豊富に残る碑文や落書きをその書かれた場所や状況までも考慮しながら、古代人の感情表出として分析する。たとえば、さまざまな形容詞の使用法の頻度を整理することによって、ローマ帝政期地方都市における民衆の感情の分布図を描くことができる。また、文法や綴りの誤りを正確さの欠落として認識するにとどまらず、なぜ錯誤が生じたかを書き手の感情表出の問題として解明することができる。幸いにもこれらの史料を収める『ラテン碑文集成』は現在大規模な再編課程にあり、それらの編纂事業（とりわけCILの第4巻と第10巻）と連携しながら、重要なものは史料の残る現場に踏み込んで作業することになる。

(3) 家族関係の分析

上記の(1)と(2)の研究において感性と感情の姿をおおまかに把握した上で、現実生活中の人間の相互関係を検討することが求められる。人はなによりも家族を基本とする共同体として生活するのであるから、家族関係あるいは家族構造を解明すべきであろう。実態としては、大邸宅に住む富裕階層の家族、小規模ながら自宅を所有する中流階層の家族、小さな借家に住む下層民の家族という3つのモデルを設け、それぞれの家族構成の典型を抽出することになる。たとえばポンペイの「パンサの家」とその周縁の共同住宅など多くの事例から、部屋の規模や構造および落書きや墓碑などの分析を通じて、五感と意識を持つ人間の姿は、彼らが生育し人格形成の基調となった家族空間における人間関係を掌握することにした。それによって、より時代性・地

域性をおびた形で理解されることになる。

(4) 社会構造の分析

上記の3モデルで捉えた家族関係に生きる人々が、カンパニア地方の住民として、いかなる社会構造に組み込まれていたかを踏まえて、そこに生活する住民の文化環境の復元を考察する。ある種の職業に従事する人々の読み書きの能力はそれぞれ特徴があり、その識字率は情報受容・伝達能力に深く関わりを持っている。それらは人々の精神生活を考察する上で重要な指標であり、言語的分析と相互作用して、社会構造から考えられる多様な文化環境を解明することになる。

(5) 人口動態の分析

家族関係と社会構造によって形をなす住民層は一地方都市全体としては人口動態として捉えられるが、さらに事例を集積することでカンパニア都市全体の人口動態を把握することにつながる。人口動態は年齢構成や世代交代などの観点から、その地域や時代の特徴を映し出し、そこに生活する住民の文化環境の枠組みとして人生観や世界観の形成に影響を及ぼすものと推察できる。ここで「感性と感情の考古学」の一つの到達点に至る。

したがって、都市とヴィッラ集落の人口動態をこれらの規模から類推しつつ、カンパニア地方全体の動向として見取り図を描く必要性がある。それによって、個々の都市やヴィッラ集落をそれぞれ位置付ける手掛かりを得られる。特定領域研究グループ全体の中で本研究チームの成果としてのローマ帝政時代の人間および人間集団の精神的空間の全体像の復元へ到達する。

これらの5段階の研究を基本的に順序を追って進めるが、それぞれの分析要素によっては相互的に関連付けながら常に検証していくことも重要となる。

4. 研究成果

火山噴火に埋まったヴェスヴィオ山周辺地域には通常なら困難な古代世界を再現する可能のある遺跡が散在している。そこに注目しながら、カンパニア地方の都市とヴィッラ集落における日常生活を背景として、古代人の心性(感性・感情・意識)を掘り起こし、「感性と感情の考古学」を開発することを本計画研究の最終目的としている。

これらの心性の土台には、表象文化、言語文化、家族関係、社会構造、人口動態が重層をなしており、それらに深く影響されながら時代と地域のなかに生きる人間の心性が形成されるのである。

本研究では、17年度以降計画的に毎年イタリアを中心とする地中海周辺地域の現地調査

をした。カンパニア地方の遺跡として、ポンペイ、エルコラーノなどの都市に限らずボスコレーレのようなヴィッラ集落など十数箇所に調査班を派遣し、碑銘・遺物・遺跡などできるだけ生の形で映像化し、画面上で解析する作業をした。公共の神殿はもちろん、大規模住宅の礼拝所のみならず中小規模の住宅における祭礼儀式をしるぼせる施設など様々な遺跡を生活空間として考察する視点から、映像の解析作業を進めた。

多種多様な住宅のタイプのなかで光と色彩および音響などの表象因子がどのような作用を及ぼしているか、また時間帯や方位を考慮すれば、明るく色彩豊かな空間が古代人の心性にいかなる影響を及ぼしているかを推察することができる。しかし、古代人の生活のなかには宗教という要因が大きい存在であり、それは古代に生きる人々の心性の背景となることを再認識した。神話に由来する壁画やモザイク画、さらには碑文にも、神々の祭礼が公共施設のみならず日常生活の隅々に入り込んでおり、古代人の感性と分かちがたく結びついている様を理解することができる。

以上のような解析作業のデータ・ベース化に伴い、年数回の研究会の開催と、国際シンポジウムへ参加し、図像学・考古学・言語学・古典学・気候学・植生学・動物学などの研究者から専門知識を提供してもらいながら、解析作業に従事した。そこには膨大な情報と知見が見出され、これらのデータを整理し検討すれば、諸要因相互の因果関係を究明し、「感性と感情の考古学」という社会史の枢軸をなす知の地平を切り開くことにつながる。

具体的にいえば、資料は文字資料と映像資料に分けられる。文字資料としては碑文・落書があり、それらの資料の収集・整理が必要である。本研究では『ラテン碑文集成』(CIL)以外の公刊書に散在する諸碑文・落書を統一した方法で検索するデータ・ベースの作成に着手した。古代人の心象風景を感知し再現するための儀礼慣習の有様を言語資料の上で確認する必要性が痛感された。そのために、『ラテン碑文集成』(CIL)第4巻の索引を全面的に加筆・修正する作業を立ち上げた。この整理作業を通じて、より大きな歴史的な文脈のなかで古代人の心性を比較検討することができるのである。この成果は国際的にも大きな意義を持つことが期待される。映像資料も現地に残るモザイク画、彫像、レリーフ、碑文飾りなどその記録は不可欠である。それらから読みとられる生活習俗は古代人の目に映る風景の背後に厳然と刻まれており、彼らの心象風景を感知し再現するために儀礼慣習の有様を言語資料と付き合わせながら確認することが不可欠になる。

イタリア南部のカンパニア地方には古代の社会と文化に関する多様にして豊富な史料が

存在し、困難をきわめる古代世界を再現できる稀な例である。建物の修復や碑銘の復元などの外形の発掘再現の作業のみではなく、本研究は古代地中海世界の頂点にあって平和と繁栄を享受した地域の人々の意識や行動の底にある感性と感情にまで迫って分析し解明することに力を注いだ。さらに古代社会のみならず、中世から近代に至る過程での変貌にも注目しつつ、この地域に残された民話や伝承を手掛かりに現在のカンパニア地方に生きる人々の気質のなかに古代の痕跡をたどることも注目した。それは研究成果をより具体的に獲得することに繋がった。今回の5段階(表象文化・言語文化・家族関係・社会構造・人口動態)の複合体をめぐる分析方法は並列的な分析にとどまらず、生成過程に焦点を当て、重層的に捉える見通しを得たことが大きな成果であった。

このような社会史研究は具体的な素材を「感性と感情の考古学」の方法によってありのままの形で再現するとともに、通時的な変化の相貌を明らかにしつつ、現代の習俗のなかにそれを読み解くことに繋がっていく。

最後となるが、今回の特定領域研究において、研究代表者ならびに研究分担者(4名)の研究論文とイタリアおよび地中海周辺地域現地調査に参加し専門的知識を持ってこの研究に協力、そして国際シンポジウム等でその研究を発表し成果をあげてきた協力者の発表内容の要旨およびその史料を研究期間の前半(平成16年度～18年度)と後半(平成19年度～21年度)に分け、中間報告書と研究成果報告書として冊子体にて纏め上げることができた。古代人の内面世界である精神を掘り起こし、「心性の考古学」を確立していくことは今後、現代のイタリア文化と社会へどのような影響をもたらし、精神の伝承が成されたかを理解する糸口となるであろう。また彼らの心性に根づく人生観、世界観を熟慮し、相互理解を深める上で大いに役立つことが期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 52 件)

(1) 本村凌二 (研究代表者)

- ① 「古文書学と碑文学—古代ローマ史の事例—」・『史料学入門』・査読；無・2006年発行・15-30頁
- ② 「帝国のシルクロード」1～10・『シルクロード紀行』・査読；無・35-42, 47-48・2006年発行・20総頁

(2) 高田康成 (研究分担者)

- ③ 「As I Fly Away One Spring Day: Reflections In Beirut on the Primordial Undercurrent of Japanese Modernity」・『国境なきヨーロッパ文学と思想における異文化接触の形』・査読；無・2010年発行・1-8頁
- ④ 「Translatio and Difference: Western Classics in Modern Japan」・『Classics and National Cultures』・査読；有・2010年発行・285-301頁
- ⑤ 「オーラトルの矛盾と威力」・『西洋古典叢書月報』78・査読；無・2009年発行・2-5頁
- ⑥ 「オーラトルの理想と残骸」・『言語』3月号・査読；無・2009年発行・32-35頁
- ⑦ 「What Is A Classic?の効用」・『T.S. Eliot Review』18・査読；有・2007年発行・1-12頁
- ⑧ 「読んでもらえぬ英文を涙こらえて書いてます」・『英語青年』10月号・査読；無・2007年発行・20-23頁
- ⑨ 「Transcendental Descent: Essays in Literature and Philosophy」・『The University of Tokyo Center for Philosophy, 2007』・査読；無・2007年発行・296頁
- ⑩ 「イアーゴの《庭》—物語と世俗的時空の産出—」・『物語り論 彼方からの声』3月号・査読；無・2007年発行・1-19頁
- ⑪ 「After English」・『英語青年』10月号・査読；無・2006年発行・2-5頁
- ⑫ 「魂の期間と牛飼いの牛」・『水声通信』15・2月号・査読；無・2007年発行・69-74頁
- ⑬ 「西洋の楽園」・『楽園—東と西—』(アジア遊学別冊特集号)82・査読；無・2005年発行・65-78頁
- ⑭ 「A Shakespearean Distance」・『Shakespeare Studies』43・査読；無・2005年発行・1-32頁
- ⑮ 「Postmodern Girl」・『Cultural Studies in Asia』・査読；無・2004年発行・157-183頁

(3) 池上俊一 (研究分担者)

- ⑯ 「“世界標準”・西暦がたどった道」・『NHK知るを楽しむ：歴史に好奇心』2007.12/2008.1・査読；無・2007年発行・130-144頁
- ⑰ 「前近代ヨーロッパの動物観」・『ヒトと動物の関係学会誌』19・査読；無・2007年発行・24-27頁
- ⑱ 「オランダ絵画の秘密」・『UP』412(東京大学出版会)・査読；無・2007年発行・35-40頁
- ⑲ 「真実は外部から」・『UP』405(東京大学出版会)・査読；無・2006年発行・14-20頁
- ⑳ 「ヒューマニズムの使命」・『創文』484・査読；無・2006年発行・19-22頁

②「フォーク誕生の秘密」・『中世ヨーロッパを生きる』第2部付録・査読；無・2004年発行・119-132頁

(4) 松本宣郎 (研究分担者)

②②「初期キリスト教における信徒の心性(メンタリティー)と生活」・『仙台白百合女子大学カトリック研究所論集』14・査読；無・2010年発行・23-57頁

②③「初期キリスト教における教会間交流」・『西洋古典学研究』57・査読；有・2009年発行・88-101頁

②④「ローマ帝国のキリスト教—哲学者とキリスト教徒」・『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』26・査読；有・2008年発行・1-29頁

②⑤「ローマ市の初期キリスト教」・『ソシアビリテの歴史的諸相』阪本浩他編・査読；無・2008年発行・97-115頁

②⑥書評“G. E. M. de Ste. Croix, Persecution, Martyrdom and Orthodoxy”・『西洋古典学研究』56・査読；無・2008年発行・154-158頁

②⑦「初期キリスト教の周縁部」・『歴史学研究』833増刊号・査読；有・2007年発行・164-172頁

②⑧「迫害原因論再考」・『西洋史研究』35・査読；有・2006年発行・151-160頁

②⑨「殉教とキリスト教史—『キリスト教における殉教研究』を読んで」・『創文』476・査読；無・11-14頁

②⑩「ubique Rommani. —チュニジア紀行」・『東北大学文学部西洋史学科同窓会誌』35・査読；無・2005年発行・3-9頁

②⑪「古代ギリシャ・ローマの都市とキリスト教徒」・『東北大学基督教青年会会報』42・査読；無・2005年発行・25-60頁

②⑫「G. Woolf et al. ed., Rome as the Cosmopolis」・『西洋古典学研究』53・査読；有・2005年発行・155-158頁

(5) 樋脇博敏 (研究分担者)

③③大清水裕・後藤篤子・芹澤悟・田中創・樋脇博敏:「テオドシウス法典(19)」・『法政史学』72・査読；無・2009年発行・77-97頁

③④樋脇博敏共著:「テオドシウス法典(18)」・『法政史学』70・査読；無・2008年発行・72-88頁

③⑤樋脇博敏共著:「テオドシウス法典(17)」・『法政史学』68・査読；無・2007年発行・78-97頁

③⑥「古代ローマにおける水道と都市生活」・『水の都市文化』・査読；無・2006年発行・11-29頁

③⑦「ジェンダーと歴史学教育—古代ローマ史の場合」・『歴史と地理』596・8月号・査読；有・2006年発行・44-47頁

③⑧樋脇博敏共著:「テオドシウス法典(16)」・

『法政史学』66・査読；無・2006年発行・34-54頁

[学会発表] (計6件)

(1) 高田康成 (研究分担者)

①“Circular Referral and Alterity: The Three Roman Ladies in “Coriolanus” and What They Tell Us Today”・Center for British and Irish Studies, University of Colorado at Boulder・2009年11月17日・University of Colorado at Boulder

②“Western Classics and Modern Japan”・Department of East Asian Studies, New York University・2009年10月13日・ニューヨーク大学

③“Shakespeare’s Rome: A Pagan Perspective”・Manichean Visions・2009年4月17日・スース大学

④「西洋化・世俗化・近代化」・東西学術研究所国際シンポジウム基調講演・2008年5月10日・関西大学

⑤“A Piece of the Continent: The Western Classic in Modern Japan”・International Conference on Reconsidering Classical Education・2007年8月29日・Geneve, Switzerland

(2) 松本宣郎 (研究分担者)

⑥「初期キリスト教の周縁部」・2007年歴史学研究会大会合同部会—生成される宗教的「境界」・2007年6月3日

[図書] (計23件)

(1) 本村凌二 (研究代表者)

①講談社学術文庫・『古代ポンペイの日常生活』・2010年・318頁

②放送大学教育振興会・『地中海世界の歴史—古代から近世』・2009年・230頁

③講談社・『地中海世界とローマ帝国』(興亡の世界史04)・2007年・388頁

④岩波新書・『多神教と一神教』・2005年・203頁

⑤講談社・『優雅でみだらなポンペイ—古代ローマ人とグラフィティの世界』・2004年・270頁

(2) 高田康成 (研究分担者)

⑥名古屋大学出版会・『クリティカル・モメント—批評の根源と臨海の認識』・2010年・466頁

⑦雄松堂出版・『中世イギリス文学入門』・2008年・143-152頁・255-260頁

⑧中央公論新社・『哲学の歴史』4・2007年・362-387頁

(3) 池上俊一 (研究分担者)

- ⑨山川出版・『イタリア 建築の精神史』・2010年・176頁
⑩刀水書房・『森と川ー歴史を潤す自然の恵み』・2010年・156頁
⑪岩波書店・『儀礼と象徴の中世』・2008年・290頁
⑫講談社・『イタリア・ルネサンス再考 花の都とアルベルティ』・2007年・328頁
⑬名古屋大学出版会・『ヨーロッパ中世の宗教運動』・2006年・745頁
⑭東京大学出版会・『西洋中世学入門』・2005年・398頁

(4) 松本宣郎

- ⑮山川出版社・『キリスト教の歴史 I』・2009年・343頁
⑯山川出版社・『イタリア史』世界各国史15・2008年・660頁
⑰南窓社・『文献解説・ヨーロッパの成立と発展』・2007年・85-94頁
⑱日本キリスト教団出版局・『キリスト教徒が生きたローマ帝国』・2006年・286頁

(5) 樋脇博敏 (研究分担者)

- ⑲寒灯舎・『ガイドブック ジェンダーから見る歴史』・2006年・199頁
⑳NHK出版・『古代ローマ生活誌』・2005年・232頁
㉑東京堂出版・『古代ローマを知る事典』・2004年・172-355頁

㉒・㉓本村凌二・高田康成・池上俊一・松本宣郎・樋脇博敏:『特定領域研究 カンパニア地方の都市とヴィッラ集落をめぐる社会史的研究ー感性と感情の考古学ー』中間報告書(2008年・77頁)・研究成果報告書(2010年)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:

取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕

◎関連ホームページ

特定領域研究が対象とするイタリアの火山噴火による罹災地(ソンマ・ヴェスヴィオ山地域)の発掘調査のホームページ:
<http://www.somma.l.u-tokyo.ac.jp>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本村 凌二 (MOTOMURA RYOJI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 40147880

(2) 研究分担者

高田 康成 (TAKADA YASUNARI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 10116056

池上 俊一 (IKEGAMI SHUNICHI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 70159606

松本 宣郎 (MATSUMOTO NORIO)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 60011368

樋脇 博敏 (HIWAKI HIROTOSHI)
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号: 70251379

(3) 研究協力者

池口 守 (IKEGUCHI MAMORU)
別府大学・文学部・准教
研究者番号: 20469399